

MGF は、☑神第一主義、☒キリスト中心主義、☓聖霊主導主義の教会

礼拝黙想 Meditating on Worship

「イエスを乗せれば子ロバでもころばない。」(キリストバカズ)

A 質問) 棕櫚の主日とは何ですか？

答え) 棕櫚の主日は、イエスが復活の1週間前にエルサレムに凱旋入城されたことを祝う日である(マタイ 21:1-11)。イエスが聖都に入城された時、ゴルゴタへの長い旅の終着点に近づいていた。イエスは失われた人々を救うために来られ(ルカ 19:10)、その救いを確かなものにするため、今がまさにその時であり、この場所でなければならなかった。棕櫚の主日は、しばしば「受難週」と呼ばれる、イエスの地上での最後の7日間の始まりを告げる日であった。

棕櫚の主日は、イエスと弟子たちがオリーブ山を越えて旅をするところから始まった。主は二人の弟子を先にベテパゲの村へ遣わし、乗る動物を探させた。弟子たちは、イエスが言われたとおり、まだ慣らされていないロバと子ロバを見つけた(ルカ 19:29-30)。ロバの縄を解くと、持ち主たちが彼らに質問し始めた。弟子たちは、イエスが与えた答え、「主がお入用なのです」と答えた(ルカ 19:31-34)。驚くべきことに、持ち主たちはその答えに満足し、弟子たちを行かせた。「二人はその子ろばをイエスのもとに連れて来た。そして、その上に自分たちの上着を掛けて、イエスをお乗せした」(ルカ 19:35)。

イエスがエルサレムに向かっていくと、大勢の群衆がイエスの周りに集まった。この群衆は、イエスがメシアであることを理解していた。彼らが理解していなかったのは、まだ王国を建てる時ではないということだった。イエスはそう伝えようとしていたにもかかわらず(ルカ 19:11-12)。道沿いの群衆の行動が「棕櫚の主日」という名前を生んだ。「大勢の群衆が道に上着を敷き、また他の人々は木から枝を切って道に敷いた」(マタイ 21:8)。人々は道に上着を敷くことで、イエスに王のような敬意を表した。王エフーも戴冠式で同様の栄誉を受けた(2列王記 9:13)。ヨハネは、彼らが切った枝が棕櫚の木からであったことを詳細に記録している(ヨハネ 12:13)。

最初の棕櫚の主日には、人々は言葉でもイエスを称えた。「群衆は、イエスの前に行く者たちも後に続く者たちも、こう言って叫んだ。『ホサナ、ダビデの子に。祝福あれ、主の御名によって来られる方に。ホサナ、いと高き所に。』」(マタイ 21:9)。イエスを賛美するユダヤ人の群衆は、キリストの預言として認め

られている詩篇 118:25-26 を引用していた。メシアの詩篇への言及は、その場にいた宗教指導者たちの反感を買った。「するとパリサイ人のうちの何人かが、群衆の中からイエスに向かって、『先生、あなたの弟子たちを叱ってください』と言った」(ルカ 19:39)。しかし、イエスは真実を語る者たちを叱る必要はないと考えた。そして、「わたしは、あなたがたに言います。もしこの人たちが黙れば、石が叫びます」(ルカ 19:40) と答えた。

イエスがエルサレムに到着する約 450 年から 500 年前、預言者ゼカリヤは、私たちが現在棕櫚の主日と呼ぶ出来事を預言した。「娘シオンよ、大いに喜べ。娘エルサレムよ、喜び叫べ。見よ、あなたの王があなたのところに来る。義なる者で、勝利を得、柔和な者で、ろばに乗って。雌ろばの子である、ろばに乗って」(ゼカリヤ書 9 章 9 節)。預言はあらゆる点で成就し、エルサレムが王を迎えた時はまさに歓喜の時であった。しかし、残念ながら祝祭は長くは続かなかった。群衆は政治的に自分たちを救い、国家的に解放してくれるメシアを求めていたが、イエスは霊的に彼らを救うために来られたのだ。何よりもまず、人類の第一のニーズは霊的な救済であり、政治的、文化的、国家的な救済ではない。

上着を着ない群衆が棕櫚の枝を振り、歓声をあげて喜んだが、彼らはイエスが来られた真の理由を見落としていた。彼らは十字架を見ることも理解することもできなかったのだ。だからこそ、「エルサレムに近づいて、都をご覧になったイエスは、この都のために泣いて、言われた。『もし、平和に向かう道を、この日おまえも知っていたら——。しかし今、それはおまえの目から隠されている。やがて次のような時代がおまえに来る。敵はおまえに対して壘を築き、包囲し、四方から攻め寄せ、そしておまえと、中にいるおまえの子どもたちを地にたたきつける。彼らはおまえの中で、一つの石も、ほかの石の上に積まれたまま残してはおかない。それは、神の訪れの時を、おまえが知らなかったからだ』」(ルカ 19:41-44)。救い主を見ても、その御名をわきまえないのは、実に悲劇的なことである。

やがて、すべての膝がひざまずき、すべての舌がイエス・キリストを主と告白する日が来る(ピリピ 2:10-11)。その時こそ、真の礼拝が実現するのだ。また、ヨハネは天において復活した主を永遠に祝う光景を記録してい

る。「その後、私は見た。すると見よ。すべての国民、部族、民族、言語から、だれも数えきれないほどの大勢の群衆が御座の前と子羊の前に立ち、白い衣を身にまとい、手になつめ椰子の枝を持っていた」(黙示録 7:9)。棕櫚の枝を持つこれらの聖徒たちは、「救いは、御座に着いておられる私たちの神と、子羊にある」(10 節) と叫びます。彼らの喜びの総和を誰が測ることができようか。

GotQuestions.com

あなたの王を見よ：棕櫚の主日が教えてくれる真の礼拝とは(ニック・ケイディ)

イエスがロバに乗ってエルサレムに入られると、群衆は歓声をあげて賛美した。彼らは道に上着を敷き、棕櫚の枝を振りながら、「ダビデの子にホサナ！主の御名によって来られる方は幸いである！」と叫んだ。(マタイ 21:9)

しかし、ルカによる福音書によれば、群衆が歓声を上げる中、イエスは涙を流した(ルカ 19:41)。イエスは、この歓声が長くは続かないこと、そして多くの人々が自分がもたらそうとした救いを拒絶するだろうことを知っていたのだ。

エルサレムの人々は、ローマの支配から自分たちを解放してくれるメシアを求めていた。しかし、イエスは彼らが当時想像しうる最高のものよりもはるかに大きく、そしてさらに素晴らしいことを成し遂げるためにやって来たのだ。彼は彼らの魂を救い、永遠の王国を築くために来たのである。

棕櫚の主日の出来事から私たちが学ぶべき最も重要な教訓の一つは、真にイエスを礼拝するとはどういうことかということだ。

1. 真の礼拝とは、イエスを王として敬うことである

イエスがロバに乗ってエルサレムに入城したことは、意図的な宣言であった。ゼカリヤ書 9 章 9 節の預言を成就することによって、イエスは自分が待ち望まれていた「ダビデの子」であり、神が永遠の家となることを約束したダビデの王座を回復する者であることを宣言したのである。

しかし、イエスは同時に、多くの人々が想像

していたような王とは全く異なる存在であることを宣言していた。征服王は軍馬に乗るものだが、イエスは子口バに乗っていた。しかも、成獣の口バですらなかった。イエスはローマ人と戦うためではなく、自らの命を捧げるためにやって来たのだ。

人々が「ホサナ」（「今こそ救ってください！」）と叫んだとき、彼らはイエスを王として認めた。たとえ彼らの多くが、イエスがもたらそうとした救いの広大さを過小評価していたとしても。しかし、彼らがイエスを王として認めたのは正しかったのだ！礼拝の本質は、イエスを王として受け入れること、つまり、人生のあらゆる領域においてイエスに究極の権威を与えることである。真の礼拝とは、私たちの計画や期待をイエスの手に委ね、自分自身を完全にイエスにゆだねることなのだ。

この棕櫚の主日、次のことを自問してみる価値があるだろう。私はイエスを私の王としているだろうか？

私の牧師であるトム・スティープはよくこう言っていた。「私はただ、神様のポケットの中の一銭になりたい。神様はそれを、ご自身が最も喜ばれる場所と方法で使ってくださいのだから。」礼拝の本質は委ねることである。神の栄光を垣間見たイザヤのように、私たちが神の威厳と恵みという両方を真に理解するとき、私たちは神の呼びかけに応え、人生を神の御心に委ねるようになるのだ。イエスを王とすることとは、イエスを自分の王座に座らせ、人生のあらゆる面でイエスの導きに従うことを意味する。

2. 真の礼拝とは、神の救いを受け入れることである

イエスがエルサレムに入城すると、町は騒然となった（マタイ 21：10）。ここで用いられているギリシャ語は「セイモス」で、地震を表すのと同じ言葉である。イエスの到来は町を揺るがしたのだ。

しかし、イエスは群衆を率いてアトニア要塞のローマ軍駐屯地へ向かいローマ人を打倒するのではなく、神殿の丘へと導き、そこで両替商の台をひっくり返し、イスラエルの宗教指導者たちの腐敗を非難した。

イエスがもたらしたに來られた救いは、彼らが

望んでいた救いではなかった。確かに、それはもっと素晴らしいものであったが、彼らの多くはまだそれに気付くことができなかった。同様に、私たちの人生にも、神が私たちの期待や希望通りになさらない時がある。このような場合、真の礼拝とは、信仰によって神と共に歩むことだ。すなわち、神の性質、約束、みことばを信じ、神があなたの人生のために立てられた計画を受け入れ、神があなたの真のニーズをご存知であること、そして、ご自身の御子さえ惜しまずにあなたのために与えてくださった方が、あなたが神のみこころに従って召されたのだから、必ずすべてのことをあなたの益となるように働かせてくださることを信じることだ（ローマ 8:28、32）。

3. 真の礼拝とは、神の清めの働きに身を委ねることである

イエスが神殿に着くと、そこに集まっていた人々を驚かせることをした。イエスは机をひっくり返し、両替人を追い出し、「『わたしの家は、あらゆる民の祈りの家と呼ばれる』と書いてあるではないか。それなのに、おまえたちはそれを『強盗の巣』にしてしまった」と言った（マルコ 11:17）。

宗教指導者たちは「異邦人の庭」を市場に変えてしまっていた。ここでイエスは旧約聖書の二つの箇所を引用している。一つ目はイザヤ書 56章 7節で、異邦人が神殿で主を礼拝するためにやって来たことを描写している。二つ目はエレミヤ書 7章 11節で、エレミヤの時代の人々が、神殿に隠れることで罪に対する神の裁きから逃れられると誤って考えていたことを描写している。当時の宗教指導者たちは、神の愛と真理をもって世界に手を差し伸べるのではなく、部外者が神に近づくために設けられていた場所を、商品を売る商人から徴収する手数料で自分たちの懐を肥やす場所に変えてしまっていた。イエスは神殿を清めることで、自分が神殿の主であることを宣言し、神殿を本来の目的に取り戻そうとしていたのである。

新約聖書には、教会という共同体として、また神の御霊が宿る信者個人として、私たちは今や神の神殿であると記されている（コリント人への手紙第一 6:19、ペテロの手紙第一

2:5）。イエスが当時神殿をきよめたように、イエスは私たちをもきよめ、浄化し、私たちの人生と教会にイエスが意図し、望んでおられる目的のために私たちを召し出したと願っておられる。

あなたの人生には、イエスが覆し、追い出したいと願っているもの、つまり役に立たず、取り除くべきものがあるだろうか？もしかしたら、イエスはあなたの人生から罪深い態度や役に立たない習慣をきよめたいと願っているかもしれない。宗教指導者たちと同じように、私たちもイエスのきよめの働きに抵抗してしまうことがある。しかし、イエスが行おうとするきよめに身を委ねるとき、私たちはより大きな喜び、自由、そして私たちの人生を通してイエスの目的を果たすためのより大きな効果を見出すのだ。

今年の棕櫚の主日、あなたはイエスにどのように応えるだろうか？

エルサレムの人々はイエスを称賛して迎え入れたが、イエスが彼らの期待に応えなかったとき、彼らの礼拝は拒絶へと変わっていった。

あなたはどうか？
あなたはイエスを王として敬い、あなたの人生における権威の座をイエスに委ねるか？

今日、あなたは神に信仰と信頼を置くことで、神の救いを受け入れるか？神のきよめの働きに身を委ね、神があなたに与えた目的を完全に実現することを妨げているあらゆるものから、神があなたをきよめてくださることを受け入れるか？

真の礼拝とは、私たちの生活のあらゆる領域をイエスに委ね、イエスの王国、イエスの救い、イエスのきよめの働きこそが私たちに与えて最も必要なものだと信じることである。

calvarychapel.com Ω

<お知らせ Announcement>

★4月5日（日） 復活祭 スペシャルポットラック 午後は『イスラエル勅令』 スピーカーはアミールさん

★4月19日（日） 午後はキッズによる復活記念スキットがあります。

MGF はキリスト狂徒の集まるキリスト狂会

「教会 [マラナサ・グレイス・フェローシップ (略称: MGF)] はキリストのからだであり、すべてのものをすべてのもので満たす方が満ちておられるところです」(エペソ 1:23)。「あなたがた [MGF] は、キリストにあって満たされているのです。キリストはすべての支配と権威のかしらです」(コロサイ 2:10)。